

複写・転送禁止

ICタグ導入 書店支援課題

ICタグを本につけて流通させる実証実験が、来夏に国内の一部の書店で始まる。導入は返品や品切れの削減など本の流通改善につながり、出版社、書店、読者のそれぞれに利点が多い。新たに必要となる書店の設備投資を支援できるかが、普及の鍵を握りそうだ。



文化
部
武田裕芸

講談社、集英社、小学館の出版社3社と商社の丸紅などが3月に新会社「PUBTEX（パブテックス）」を作り、出版物向けのICタグの開発を進めている。

来年7月以降、この3社のコミックや文庫にICタグをつけて出荷する予定だ。ICタグは、極小のICと7mm×1.5mm程度の薄いアンテナ部分からなる。

しおり型の紙に貼りつけて本に挟み込む形などが検討されている。

多くの書店で現在、本の在庫管理に利用するのは、バーコードだ。発行国や書名、出版社、値段などの情報が記載されている。客が出版物を買う際、店員がレジで読み取り機を使って代金の処理をすると、売り上げデータを蓄積できる。これに対し、微弱な電波を用いるICタグは、リーダリーを用いて、基本的な情

◀本につけられるICタグ



18 TT

C533017833001F17A5000001
商品管理用にRFIDタグを利用しています。
RFIDタグは可燃ゴミとして捨てる事が出来ず。

ICタグのメリット

出版社	返品率の削減や販促活動の強化
書店	棚卸し、レジ打ちなど作業を効率化
読者	欲しい本を店頭で確実に入手

報に加え、その本が現在、どこにあるかなどより細かな情報が1冊ずつ分かる。紙の本の不振が続く出版界では現在、精密な在庫管

理への関心が高まっている。出版社が出版取次経由で書店に供給する本と、客の需要のミスマッチが起き、書店に出荷した書籍の約3割、雑誌の約4割が返品され、年間2000億円以上の損失が出ているためだ。ICタグを使えば、出版社は、本の注文が書店からあった際などに、流通上のどの地点に何冊滞留しているか確認し、対応することが可能になる。過去の本の売れ行きデータなどが蓄積されれば、AIのデータ解析と組み合わせ、新刊が出たときに適切な量の本を供給し、返品や品切れを減らすことも期待できる。

さらに、タグに細かな情報をのせ、同じ本でも一定期間内に特定の書店で販売する分だけに特典をつけるといった販売上の工夫を図れるようになるという。書店側は、1冊ずつリーダリーで直接触れなくても箱に入ったまま数十冊の本のデータを読み取れるICタグの性質を生かし、棚卸し、レジ打ちなどを効率化できている。専用ゲートを使った万引き対策もできる。

出版流通に詳しい文化通信社の星野渉社長(58)は「参加するこの3社はコミックなど大量の出版物を扱い、投資効果は高い。効果が見えれば導入する出版社や書店も増え、本格的な普及が期待できるだろう。書店が設備投資する際の支援策も考えるべきだ」と話す。